

Sustainable Kyushu

九州
さすてなぶる

株式会社 林田産業

はやしだ さんぎょう

代表取締役

林田 賀津利氏

Katsutoshi Hayashida

取締役

林田 和也氏

Kazuya Hayashida

取引店／福岡銀行 福岡支店



林田賀津利社長

かつて「3K」と呼ばれた事業を大胆にリブランディング。
従業員の仕事への向き合い方にも大きな変化が生まれ、
日常会話で「SDGs」が飛び交う職場に。

「地球の掃除人」という経営理念の

もと、福岡県福津市において、ごみ・し尿などの一般廃棄物収集運搬、浄化槽維持・下水処理場維持管理をおこなうとともに、木くずのリサイクル工場「グリーンリサイクルセンター」を運営する株式会社林田産業。

「SDGs未来都市」に選定された福津市でSDGs宣言をおこない、それまでの取り組みが認められて、市より「SDGs宣言書」が贈呈された同社の代表および次期代表にお話を伺いました。

当社の事業こそSDGsそのもので
世の中になくてはならない仕事

当社の原点は、私（賀津利社長）の父が1955年に開業した「林田商店」で、当初は木材の運搬がおもな業務でした。その後、廃棄物処理法が施行されて、し尿やごみの収集運搬が民間に委託されるなかで、ごみ収集運搬において旧福岡町からの委託業者となります。

私が子どもの頃は、家業について周りの子たちから心ない言葉を浴びせられることもあり、また、それで、「3K（きつい・汚い・危険）」などと呼ばれてしまう廃棄物処理の仕事に、ややコンプレックスを抱くようになり、1975年に会社が法人化されてまもなくの時代に

入社してからも、そういった感情は私のなかに
ずっとくすぶっていました。

転機となったのは、私が父から経営を引き継いで新規事業を模索していた時期で、社外から招いた経営コンサルタントと話し合いを重ねるなかで「廃棄の仕事こそSDGsそのものであり、なくてはならない仕事だ」と思えるようになったのです。九州経済産業局発行の『九州SDGs経営推進ハンドブック』との出会いや、地域の経営者が集まる勉強会での意見交換も、私が意識を変えるきっかけになりました。

世の中の風潮や時流としてではなく
自社の取り組みを本質的に理解する

そうした気づきの体験を経て、私が次に考えたのが、従業員の皆にも「自分たちの仕事は、サステナブルな社会を創っていくSDGs事業だ」と理解し実感してほしいということ。「自分は本当に素晴らしい仕事をしている」と思えば、ごみやし尿の回収をしながら地域住民のみなさんとコミュニケーションを図るなかで、SDGsについて自分自身の言葉で話せるようになるだろうし、仕事のやりがいや働く喜びも、もっと得られるようになるはずです。

そこで、SDGs経営に関する社内への理解・浸透のためのプロジェクトを立ち上げました。まず幹部社員を対象にSDGs研修を実施。「当社の事業にどのような社会的提供価値があるのか」を、SDGsで定められている17のゴールに沿ってひとつずつ言語化し、整理していきました。この作業は、各自がSDGsを自らが取り組むべきこととして理解するのにとても役立ったと思います。結果として、当社の



グリーンリサイクルセンターを見学(左から林田和也取締役、松浦支店長(福岡銀行))



遠隔操作でバックホーを操縦



遠隔操作で動く無人のバックホー

社会的提供価値を四つに分類することができました。

具体的には、適正な廃棄物の分別収集によるリサイクル向上や適正な排水処理による地域の安全衛生管理などを通じた「地球環境浄化保全」、生ごみ堆肥や木くずチップの農業利用による食の安心安全の推進や産官民学連携で実現する資源循環を通じた「共に創る循環の社会」、見守り活動による地域連携や地域清掃活動による住みよい街づくりなどを通じた「人の安心、まちの安全」、社内システムのIT化と重機遠隔操作システムの導入などを通じた「社員の健康、安全、活躍推進」の四項目です。

次の段階として、幹部社員とともに教育プロセスを整理したうえで、全従業員を対象としてワークショップを交えた研修を実施しました。その過程で、現場を支える従業員からさまざまなアイデアが生まれると同時に、それぞれが抱えていた思いも顕在化。おかげで各自の環境配慮への意識が向上し、全員がSDGsに正面から取り組む姿勢をもつようになりました。すると、従業員たちの日常会話で

「今の、ちゃんとSDGsできてたかな?」といった言葉が自然と飛び交うようになっていました。

SDGsを軸に自社事業のリブランディングを図り、その社会的意義に気づいたことで、自社の認識に関しても「行政の委託先」から「パートナーとしての関係性」に切り替わったと感じています。

「廃棄物を運搬処理する会社」から 「資源利活用 of 事業集団」へ

「廃棄物を運搬処理する会社」から「資源利活用の事業集団」へと転じた私たちは、廃棄から再生へと移行する循環型社会を実現するためにM&Aにも乗り出し、有機質肥料製造会社のM&Aを実施しました。この一件では、買収先企業へのリファイナンスで福岡銀行にご支援いただき、たいへんお世話になりました。

当社の資源利活用事業の主な柱としては、「食品残渣への取り組み」と「福岡県認定のリサイクル製品『竹肥姫』」が挙げられます。

まず食品残渣ですが、ショッピングモール、スーパー、ホテル、飲食店、学校給食などから出る食材と食品の廃棄物を堆肥化して、農家さんやJ Aなどで利用してもらう取り組みをおこなっています。

たとえば、福岡市内のショッピングモールの場合、毎日発生する0.3〜0.5トンの調理くずと食品残渣から年間144トンの堆肥化と年間294トンの二酸化炭素削減を実現できました。堆肥を利用された方からは「土がふわふわになって病気の発生がなくなった」といった声が寄せられています。



竹肥姫

竹のリサイクル製品である「竹肥姫」は、日本各地で深刻化している放置竹林問題の解決に向けて開発されたもので、伐採された竹を機械にかけてすり潰し、パウダー状にした竹100%の製品です。竹に含まれるミネラルやケイ酸などの成分によって土壌が改良されるため土壌活性材として利用できるほか、生ごみの発酵を促進する堆肥基材、カプトムシの床材やえさなどにもなります。

そのほかにも、当社のグリーンリサイクルセンターに持ち込まれる木の枝葉や幹は、利活用のための加工を施しています。枝葉は、細かく



集められた樹木・剪定枝(生木)は破砕機で粉碎される

破砕し「枝葉チップ」にすることで土壌改良材、畜産水分調整材に。木の幹は、約3センチ角の「ウッドチップ」にして紙の原料、雑草防除用やドッグラン用などのエクステリア資材として利用します。

また、資源利活用は、その重要性を生活者全体で意識することが第一と考え、地域の小学校で食品フードロスやコンポスト活動などに関する子ども向け環境教育を実施し、地域のSDGsイベントにも積極的に参加しています。

私たちのそうした取り組みは今後変わらばずおこなっていきますが、会社としては創立五十周年の節目を迎えました。そして二年後に、経営のバトンを現・取締役である息子の和也に渡すことを決めました。ですので、当社の今後については、次代を担う和也からお話させていただきます。

**時代に合わせて進化していくには
挑戦し続けるしかない**

私(和也取締役)が思いますに、地球環境も社会情勢も人々の生活も刻々と変化している

なか、十年先、二十年先に、私たちも企業も、今と変わらず活動が続けられる状況にいられるかどうかは、私たちが挑戦し続けているか、進化のために一歩ずつでも前に踏み出し続けているかにかかっているのではないのでしょうか。

たとえば、放置竹林問題への当社の答えは「竹肥姫」で完結したわけではありません。竹には化粧品、医薬品など多様な利活用の用途が見つかっています。抜本的解決につながる事業化を、異業種を含むさまざまな企業や団体、研究機関、行政とともに、オープンイノベーション形式で連携しながら進めていきます。



会社の将来を語る林田和也取締役



本社前にて。左から林田和也取締役、林田賀津利社長、松浦支店長(福岡銀行)

株式会社 林田産業

■本社所在地：〒811-3217 福岡県福津市中央5丁目12番1号

■電話番号：0940-42-0444

■創業：1955年

■設立：1975年6月2日

■従業員数：50名

■事業内容：一般廃棄物収集運搬(し尿汲取・ゴミ収集運搬)、産業廃棄物収集運搬(汚泥運搬・ゴミ収集運搬)、浄化槽維持管理・清掃、公共下水道処理施設維持管理、一般廃棄物中間処分(木くず・草・生ごみ)、産業廃棄物中間処分(木くず) ※パレット、建築廃材等を除く

■事業所：グリーンリサイクルセンター(福岡県福津市)

